

# [館蔵品研究] 羽状紋地獣紋鏡と漢初の長沙

石谷 慎

## はじめに

黒川古文化研究所は、羽状紋地獣紋鏡3面、羽状紋地変形獣（禽）紋鏡4面を所蔵する。そのうちの獣紋鏡2面と変形獣紋鏡2面は1951年刊行の『古鏡図鑑』（五・六・七上下）に戦国時代の鏡として掲載され、さらにそのうちの2面は樋口隆康の『古鏡』（1979）に「戦国式鏡」として掲載されるなど、戦国鏡の代表例として早くから知られていた。

近年では、本誌13号（2014）掲載の曾布川元所長「漢鏡と戦国鏡の宇宙表現の図像とその系譜」のなかで戦国鏡の宇宙表現の例として紹介された。2015年刊行の研究図録シリーズ2『中国鏡でめぐる神仙世界』にも戦国時代の鏡として収録している。

しかし筆者自身は、これまでに戦国鏡に関するいくつかの論文を発表し、修士論文・博士論文でも戦国時代の羽状地紋鏡群を大々的に扱っておきながら、羽状紋地獣紋鏡についてはほとんど言及してこなかった。というより、多くの戦国鏡を見てきたからこそ、世に知られている総数の割にヴァリエーションの豊富なこの一群の鏡について、不用意に言及できなかった。

羽状紋地獣紋鏡の性質は、未だにつかみきれないところはあるが、近年に透彫二重体鏡や細地紋鏡・蟠螭紋鏡など戦国時代の楚や秦・前漢時代の長江中・下流域で制作・使用された鏡を取り扱ってきた過程で、多少のアイデアが湧いている。所蔵鏡の紹介を兼ねて、10年にわたり続けてきた戦国鏡研究の成果と筆者の考えをまとめておきたい。

## 一 所蔵鏡の紹介

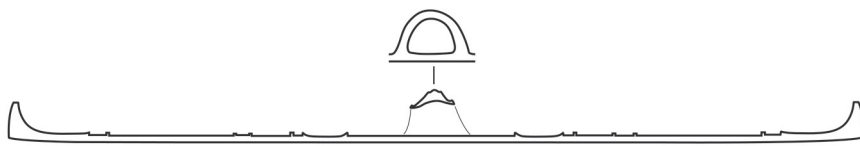
まずは『黒川古文化研究所収蔵品目録』（第2・鏡鑑）にしたがい、黒川古文化研究所が所蔵する羽状紋地獣紋鏡を紹介する。全体に共通する特徴として、羽状紋地獣紋鏡の鈕座は円形（円圈鈕座）である点、地紋の羽状紋は穀粒紋を充填するシンメトリカルな構図（宮本C類、岡村b類）に限られる点を挙げられる。これについては逐一言及しない。

○鏡9 直径16.9cm 縁厚0.7cm 伝安徽省寿県出土、『古鏡図鑑』五（図1-1）

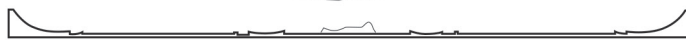
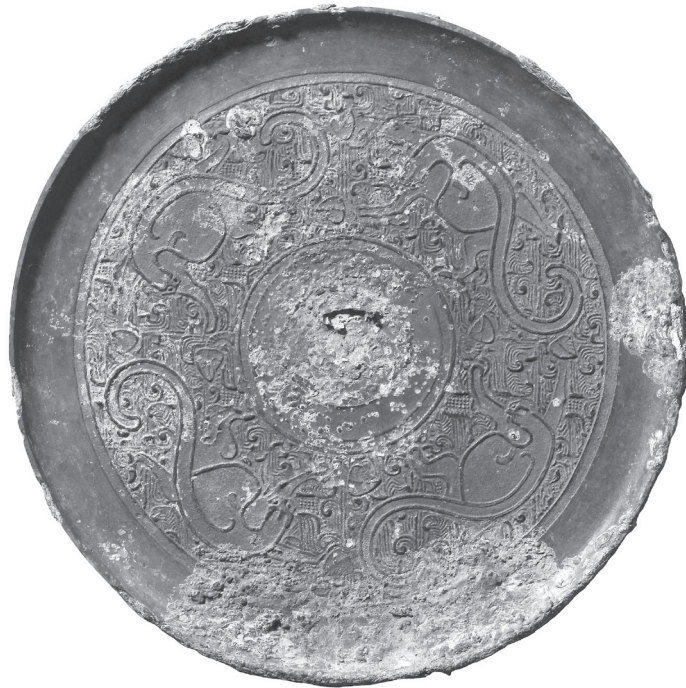
縁は幅の広いヒ面で、端部には平坦面をほとんど残さない。鈕は大ぶりで中ほどに二条の凸帯をもつ（四弦鈕）。獣は腹に頭を向けて丸まり、左前脚と左後脚は周縁を、右後脚は鈕座を、右前脚は隣の獣の尾をつかむ。大きく開いた口には牙が表現される。地紋単位の計測値は2.5×1.6cm。

○鏡10 直径13.6cm 縁厚0.5cm（図1-2）

縁は幅の広いヒ面で、端部にわずかに平坦面を残す。鈕は欠けているが、三弦鈕か四弦鈕であった痕跡をとどめる。鈕座四方から左に傾く子葉が伸び、獣の右後脚はその子葉を、右前脚は隣の



1



2

图1 黑川古文化研究所藏羽状纹地兽纹镜 (1. 镜9 2. 镜10 S=2/3)



図2 黒川古文化研究所蔵羽状紋地獣紋鏡（鏡11 S=2/3）

獣の尾の後方にある別の子葉に伸ばし、左前脚・左後脚はそれぞれ縁と鈕座に向かって伸びるが、つかんではない。獣の頭部は小さく、正面を向き、腹は異様に大きく膨れる。地紋単位の計測値は  $2.4 \times 1.4$  cm。

○鏡11 直径 21.2 cm 縁厚 0.7 cm 『古鏡図鑑』六（図2）

縁は幅の広いヒ面で、端部には平坦面をほとんど残さない。鈕の中央には刻み目をもつ弦紋が一条あり、その両側に渦紋を施す。特異であり、付け根に不自然な段差を認めることから、後補と考える。鈕座の外側には八角形を呈する突帯がめぐり、そのうちの四方には方形の柱が、残りの四方には子葉がつく。子葉の形状は羽状紋地葉紋鏡に見られるチューリップ形葉紋に類似し、

そこから茎のようなものが伸びて先端を逆「L」字形に巻く。獣は上を向き、右後脚を鈕座、左後脚と左前脚を縁に接してふんばり、右前脚は前方の子葉から伸びる茎をつかむ。地紋単位の計測値は2.6 × 1.6 cm。単位の途切れをたどると、2 × 2分の単位がひとつの地紋原型によってつくられているとわかる。ところどころに凸の傷があり、鑄型についての傷が転写されたと思われる。一見健全な状態に見えるが、複数に割れた破片を接合してある [川見 2016]。

○鏡 12 直径 16.1 cm 縁厚 0.6 cm 『古鏡図鑑』七上 (図 3)

収蔵品目録では「羽状獣文地四禽鏡」と表記される。縁は幅の広いヒ面で、端部にわずかに平坦面を残す。鈕の中央に一条の凸帯をもつ (三弦鈕)。他の鏡で獣が配されるところに幾何学的な紋様を置き、尾に相当する曲線が伸びて先端が植物様を呈す。幾何学紋様のうち対面する2つには羽状紋、残りの2つには円形が飾られる。地紋単位の計測値は2.7 × 1.7 cm。抽象化された主紋には類例を認めるものの、地紋が浅く、鏡背全体に瑕疵が多い。後世の偽作 (踏返しか?) と判断し、本稿では参考程度の扱いとする。

○鏡 13 直径 14.0 cm 縁厚 0.4 cm 『古鏡図鑑』七下 (図 4-1)

縁は幅の広いヒ面で、端部には平坦面を残さない。鈕の中央に一条の突帯をもつ (三弦鈕)。主紋は青銅器の冑紋のような形で、右上方には鉤形の構造が、それと交差して左方には獣の尾のような曲線が伸び、子葉形をつける。地紋単位の計測値は2.6 × 1.6 cm。単位の途切れにより、2 × 2分の地紋原型を認める。単位の一部に本来の様態とは異なる箇所が認められ、鑄型の段階で修正が施されたと考えられる。

○鏡 1005 直径 14.0 cm 縁厚 0.4 cm (図 4-2)

鏡 13 と器形・紋様の特徴が一致する。地紋単位の計測値も 2.6 × 1.6 cm で同じ。単位の途切れや鑄型上での修正まで鏡 13 と一致するが、鏡 13 にはない範傷が見られ、全体に鑄上がりも悪い。鏡 13 の鑄型を再利用したか、それらの製品からくり返し鑄型を起こす方法でつくられた鏡であろう。大きく二つに割れた破片を接合してある [川見 2016]。



図 3 黒川古文化研究所蔵羽状紋地変形獣紋鏡 (鏡 12 S=1/2)

○鏡 14 直径 13.9 cm 縁厚 0.3 cm (図 5)

花蕾紋鏡と呼ばれる類の鏡であるが、目録では「羽状獣文地変形五獣鏡」とされるため、あわせて紹介する。縁は幅の広いヒ面で、端部には平坦面を残さない。鈕の中央に一条の突帯をもつ (三弦鈕)。鈕座の外側 5 ヲ所に茎をもつ子葉があり、さらに左



图4 黒川古文化研究所蔵羽状紋地変形獣紋鏡 (1. 鏡 13 2. 鏡 1005 S=2/3)



図5 黒川古文化研究所蔵羽状紋地変形獣紋鏡（鏡14 S=2/3）

方に茎を伸ばして花卉をつける。子葉の右上方には縁から出る鉤状の構造が交差する。子葉の形は羽状紋地葉紋鏡に見られるハート形葉紋に似る。地紋単位の計測値は  $2.4 \times 1.7$  cm。単位紋様の一部が改変され、通常とは異なる様相を呈する。

## 二 羽状紋地獣紋鏡の分類と編年

以上に紹介したように、戦国鏡の分類にあたっては、縁形態、鈕形、鈕座形、主紋、地紋の種類と単位が指標となる。このうち、とくに制作年代の違いを示す属性として、縁形態が最も重要である。紋様の変化傾向が重視されることもしばしばあるが、林巳奈夫が殷周青銅器の研究においてひとまず紋様や銘文を考慮からはずし、もっぱら器の側視形に注目して型式学的編年を行い、相互間の並行・前後関係を明らかにしたように〔林1978〕、器物の年代はあくまで形態、とくに断面形から決められるべきであって、そのうえで紋様の変遷をたどっていく手順が適切である。

### （1）縁形態に基づく分類

戦国鏡の縁形態については、平縁からヒ面縁への変化過程において、周縁端部の平坦面がしだいに狭くなる変遷観が示されている〔Karlgrén1941、宮本1990、岡村1991〕。そのなかでも、前

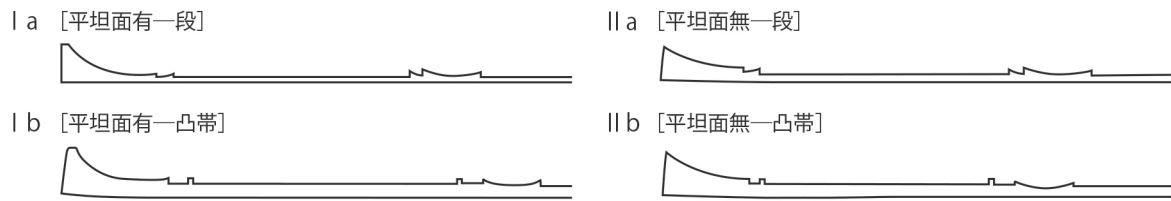


図6 羽状紋地獣紋鏡の縁形態

3世紀後半の鏡には端部平坦面をわずかに残す形態（宮本D類）から完全にヒ面化した形態（宮本E類）への変化に加え、前者のなかでの周縁の巨大化という変化傾向も指摘されている。また、秦代に入る前3世紀末の段階には、周縁端部のヒ面化・屹立にあわせてヒ面内側の段が凸帯へと変化することも指摘される。

先に紹介した所蔵羽状紋地獣紋鏡においても、いずれも縁が幅の広いヒ面を呈しながら、端部にわずかに平坦面を残す場合と平坦面を残さない場合とが認められた。そこで、周縁端部に平坦面を残すか残さないか、周縁内側が段か凸帯か、縁がどの程度の厚みか、という3つの観点から獣紋鏡の縁形態を捉えなおしてみる。発掘資料に基づき（表1）、平坦面の有無と内側形状の組合せを確認すると、次の4通りになる。

平坦面有一段 平坦面有一凸帯

平坦面無一段 平坦面無一凸帯

これに縁の厚みを加味すると（図6）、

平坦面有一段 縁厚 0.4～0.5 cm（I a 式）

平坦面有一凸帯 縁厚 0.5～0.7 cm（I b 式）

平坦面無一段 縁厚 0.3～0.5 cm（II a 式）

平坦面無一凸帯 縁厚 0.5～0.6 cm（II b 式）

というように、あくまで傾向であるが、平坦面の有無にかかわらず、内側が段か凸帯かによって0.5 cm程を境に縁厚に違いが見られる。よって、獣紋鏡に関しては、[平坦面有一段]の縁形態を起点に、周縁端部のヒ面化、あるいは周縁の屹立と内側の段の凸帯化という二方向の変化を経て、最終的には完全にヒ面化・屹立した周縁端部で、内側が凸帯の[平坦面無一凸帯]になると仮定する。

## （2）地紋単位と周縁の変化傾向

縁形態に基づく鏡自体の変化傾向を前提としたうえで、次に注目すべきは地紋の単位紋様である。戦国鏡の地紋単位が蟠螭紋状に複雑に絡みあう構図（宮本B類、岡村a類）から穀粒紋を充填するシンメトリカルな構図（宮本C類、岡村b類）へと変化することがすでに明らかとされている。そして、後者（以下、羽状紋C類）のなかでも、約2.7×1.7 cm、約2.5×1.6 cm、約2.3×1.5 cmを基準とする単位紋様があり、約2.7×1.7 cmを基準とする単位紋様をもつ鏡は秦将白起による楚の郢都陥落（跋郢：前278年）以前の前3世紀第1四半期に遡る可能性がある〔石谷2013・2021〕。

獣紋鏡に関しては、いずれも羽状紋C類を地紋とするが、所蔵鏡に見たように、地紋単位の計測値には縦2.4～2.6 cm、横1.4～1.7 cmのばらつきがあり、部分的な修正や単位紋様の改変も認める。そこで、単位の規格と内部の紋様の差異に基づいて地紋単位を次のように分類する（図7）。

表1 出土羽状紋地獸紋鏡

出土地	直径 (cm)	縁厚 (cm)	鈕	鈕座	縁平坦面	七面内側	形態分類	地紋單位 (cm)	地紋分類	配置	主紋	報告年代	備考	出典
河南省南陽一中436号墓	15.7	0.5	三弦	円圈	有	段	I a	2.3 × 1.6	γ	+	四獸紋 (正 × 2・側 × 2)	前漢前期		蒋 2010、南陽市文物考古研究所 2012
湖南省長沙妹子山20号墓 (: 1) (M1173)	17.5	0.6	?	円圈	有	?	I ?	2.7 × 1.7	α	×	四獸紋 (正)	戦国後期中段 (BC278 ~)		湖南省博物館ほか 2000
湖南省長沙子弹庫41号墓 (: 9) (M1387)	16.5	0.5	?	円圈	有	凸帯	I b	2.6 × 1.6	α	×	四獸紋 (正 × 2・側 × 2)	戦国		湖南省博物館 1959・1960、湖南省博物館ほか 2000
湖南省益陽黄泥湖586号墓	14.4	?	三弦	円圈	有	凸帯	I b	2.5 × 1.5	α	×	四獸紋 (側)	—	長沙桂花園 M27 鏡と同型	湖南省省文物考古研究所 2017
湖南省長沙筲笠坡744号墓 (: 6) (M407)	19.1	0.7	?	円圈	無	凸帯	I b	2.7 × 1.6	α	×	四獸紋 (側)	戦国後期	獸紋尾部に蕾状表現 本文では直径 18.8 cm	湖南省博物館 1960 湖南省博物館ほか 2000
湖南省長沙楓樹山42号墓 (: 1) (M603)	14.4	0.6	三弦	円圈	有	凸帯	I b	2.3 × 1.4	β ?	×	四獸紋 (正・子葉付属)	戦国後期		湖南省博物館 1960 湖南省博物館ほか 2000
湖南省長沙劳动広場賀龍体育館1号墓 (: 1) (M1937)	14.3	0.5	三弦	円圈	有	凸帯	I b	2.3 × 1.4	β	×	四獸紋 (正)	戦国	范縵で獸紋の手が切れ、地紋の方向も変わる。『楚風』では直径 12.2 cm	湖南省博物館ほか 2000 長沙市博物館 2010
江蘇省儀徵張集鄉团山1号墓 (: 78- 1)	24.0	0.8	三弦	円圈	有	繩状 (斜線)	I b	2.5 × 1.5 2.1 × 1.3	α・β	+	四獸紋 (側)	前漢前期	獸紋の尾部に葉紋	南京博物院ほか 1992 儀徵博物館 2012
湖南省長沙月亮山55号墓	19.0	?	三弦	円圈 光芒	無	段	II a	2.7 × 1.7	α	×	四獸紋 (正)	戦国		湖南省博物館 1960
湖南省長沙柳家大山40号墓 (: 11) (M1061)	10.8~	?	三弦	円圈	?	段	?a	?	?	+	四獸紋 (側)	戦国後期中段 (BC278 ~)		湖南省博物館ほか 2000
湖南省長沙桂花園27号墓	14.0	?	三弦	円圈	無	凸帯	II b	2.4 × 1.4	α	×	四獸紋 (側)	戦国	益陽黄泥湖 M586 鏡と同型	湖南省博物館 1960
湖南省長沙砂野4号墓 (: 1) (M1593)	17.2	0.45	三弦	円圈	無	凸帯 (席紋)	II b	2.5 × 1.5 2.2 × 1.3	α・β	+	四獸紋 (側)	—	鈕座圈帯に斜格子紋 獸紋尾部に蕾状表現 地紋の方向変わる	湖南省博物館ほか 2000



湖南省長沙子彈庫 民主嶺10号墓(：7) (M1043)	13.8	0.45	三弦	凹圈	有	段	I a	2.6 × 1.6	α	—	五花蕾紋	戦国後期中段 (BC278～)	下2面と同型	湖南省博物館ほか2000
湖南省常德市 運輸管理所4号墓 (M555)	13.7	0.5	?	凹圈	有	段	I a	? × 1.5	α	—	五花蕾紋	—	上下の鏡と同型	湖南省常德市文物局ほか 2010
湖南省常德市綿 紡廠29号墓	13.6	?	三弦	凹圈	有	段	I a	?	α	—	五花蕾紋	—	上2面と同型	常德博物館2010
湖南省長沙左7号 墓(M1448)	14.5	0.5	?	凹圈	無	凸帯	II b	2.6 × 1.6	α	—	五花蕾紋	戦国	長沙魏家堆 M10 と 同型	湖南省博物館1959 湖南省博物館ほか2000
湖南省長沙魏家堆 10号墓	14.0	0.6	三弦	凹圈	無	凸帯	II b	2.5 × 1.5	α	—	五花蕾紋	戦国	長沙左 M7 と同型	湖南省博物館1960 李1957
河南省南陽宛計生 委4号墓	14.3	0.5	?	凹圈	無	凸帯	II b	2.7 × 1.7	α	—	五花蕾紋	前漢前期	単位が多く途切れる	蒋2010
湖南省長沙大冬瓜山 5号墓(4)(M469)	16.2	0.4	?	凹圈 連弧	無	連弧	II b	2.5 × 1.6	α	—	五花蕾紋	戦国後期		湖南省博物館ほか2000
湖南省長沙勝利路 10号墓(：1) (M2009)	14.2	0.7	三弦	凹圈	有	凸帯	I b	2.4 × 1.5	α	×	四花蕾紋	—		湖南省博物館ほか2000 長沙市博物館2010
湖南省長沙九尾冲 水泥電桿廠21号 墓(：1)(M1614)	16.8	0.45	?	凹圈	無	段	II a	?	?	×	四変形獸紋A	—	本文では直径16.5 cm	湖南省博物館ほか2000
湖南省長沙柳家大 山33号墓(：33) (M1058)	14.8	0.5	三弦	凹圈	有	凸帯	I b	2.6 × 1.6	α	×	四変形獸紋A	戦国後期中段 (BC278～)	下2面と同型 本文では直径14.5 cm	湖南省博物館ほか2000
湖南省長沙子彈庫 3号墓	14.4	?	三弦	凹圈	有	凸帯	I b	?	?	×	四変形獸紋A	戦国	上下の鏡と同型	湖南省博物館1960
湖南省常德第三磚 廠11号墓	13.8	0.5	三弦	凹圈	有	凸帯	I b	2.6 × 1.6	α	×	四変形獸紋A	—	上2面と同型 (縁幅・鈕座径異なる)	常德博物館2010、湖南省 常德市文物局ほか2010
河南省南陽一中 168号墓	18.7	0.4	三弦	凹圈	無	—	II	—	—	—	四変形獸紋A	前漢前期		蒋2010
湖南省長沙魏家堆1 号墓(：27)(M1140)	13.9	0.35	三弦	凹圈	無	段	II a	2.6 × 1.6	α	×	四変形獸紋B	戦国後期	下4面と同型	湖南省博物館ほか2000
湖南省里耶麦茶 73号墓	13.8	0.4	三弦	凹圈	無	段	II a	2.6 × 1.6	α	×	四変形獸紋B	—	上1面・下3面と同型	湖南省文物考古研究所 2007
湖北省江陵鳳凰山 8号墓	13.7	0.4	三弦	凹圈	無	段	II a	2.5 × 1.5	α	×	四変形獸紋B	前漢	上下2面と同型	長江流域第二期文物考古 工作人員訓練班1974
湖南省長沙子彈庫 86号墓(：1) (M1946)	13.5	?	三弦	凹圈	無	段	II a	2.5 × 1.6	α	×	四変形獸紋B	戦国後期	上3面・下1面と同型	湖南省博物館1960
湖南省長沙紙園冲 工地86号墓	13.5	?	三弦	凹圈	無	段	II a	2.5 × 1.5	α	×	四変形獸紋B	戦国	上4面と同型	湖南省文物管理委員会 1957

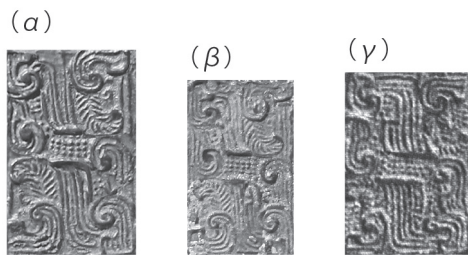


図7 羽状紋地獣紋鏡に見られる地紋単位(ほぼ実大)

$\alpha$  (アルファ) : 地紋単位  $2.5 \times 1.5 \text{ cm} \sim 2.7 \times 1.7 \text{ cm}$  紋様内部が明瞭で、単位の四周が整う

$\beta$  (ベータ) : 地紋単位  $2.1 \times 1.3 \text{ cm} \sim 2.3 \times 1.4 \text{ cm}$  紋様内部の細線や穀粒紋が模糊として、単位の四周が欠ける。単位の縦横比率にばらつきが出るのはこのためである

$\gamma$  (ガンマ) : 地紋単位  $2.3 \times 1.6 \text{ cm} \sim 2.4 \times 1.7 \text{ cm}$  紋様内部に明瞭な部分と模糊とした部分が混ざる。紋様内部の構成が $\alpha$ や $\beta$ と異なり、単位の四周が切りとられたように窮屈になる

$\alpha$  は戦国鏡に一般的な単位紋様で、 $\beta$  は跋郢以降に見られる約  $2.3 \times 1.5 \text{ cm}$  を基準とする単位紋様と同一のものである。<sup>(1)</sup>  $\gamma$  は、紋様を改変したような痕跡や単位四周の様子がすべての単位紋様で共通することから、所蔵鏡 13 のような鑄型上での改変ではなく、印型(スタンプ)がそもそもそのような紋様につくられていたと判断する。

先に行った平坦面の有無と内側形状の組合せ・縁の厚みに基づく分類と、地紋単位との関係を見ると、I a 式および II a 式には地紋単位  $\beta$  が認められず、I b 式および II b 式には地紋単位  $\beta$  もしくは  $\alpha \cdot \beta$  の組合せが認められる(図 8)。また、I a 式には唯一  $\gamma$  が認められる。縁形態の変化傾向とすでに明らかにされている地紋単位の変化とから考えて、周縁の屹立と内側の凸帯化を示す I a 式から I b 式、II a 式から II b 式への変遷観に誤りはないようである。ただし、周縁端部の平坦面の有無については、少なくとも地紋との関係からは、時期差を示すと認める積極的な根拠がない。

あわせて問題となるのが、端部の平坦面の有無はともかく、縁形態を見るに獣紋鏡はいずれも前 3 世紀後半に位置づけられるにもかかわらず、地紋単位を見るとほとんどが前 3 世紀第一四半期に遡る戦国鏡に特徴的な  $\alpha$  をしているという点である。これらの問題を解決するためには、獣紋鏡だけでなく、ほかの羽状地紋鏡群との関係を考える必要がある。

### (3) 羽状紋地山字紋鏡・葉紋鏡との関係

地紋単位  $\alpha$  は、前 278 年以前の楚の郢都江陵(荊州)出土の鏡に見られるため、跋郢の前 278 年以前から江陵でつくられ始めた一群と考えられる。それらは同一の印型を用いてつくられた可能性が高く、したがって制作時期も近いと判断できるが、だからといって地紋単位  $\alpha$  をもつすべての鏡の制作地が江陵と決まるわけではない。

獣紋鏡と同じく羽状紋を地紋とする山字紋鏡では、地紋単位  $\alpha$  をもつ鏡のうち、早い段階のものは鈕座に対して正方向に地紋を配し(「+」配置)、新しい段階のものは斜めに配する(「×」配置)傾向が見られる。跋郢以降に制作されたと考えられる葉紋鏡に見られる地紋単位  $\beta$  も斜め方向に配されることから、江陵で地紋単位  $\alpha$  の印型を用いて鏡づくりをおこなった工人もしくは工房が跋郢を契機として長沙へと移り、同じ印型を用いて「×」配置の山字紋鏡の生産を始めたと考えている[石谷 2021]。また、山字紋鏡は主紋配置の違いから I ~ X 式に分類され[廣川 2005]、そ

I b 式  
地紋  $\alpha$



1

I b 式  
地紋  $\beta$



2

I a 式  
地紋  $\gamma$



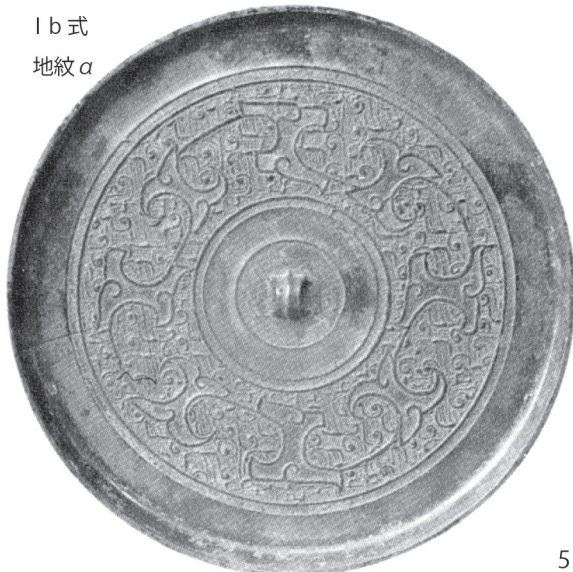
3

I a 式  
地紋  $\alpha$



4

I b 式  
地紋  $\alpha$



5

II a 式  
地紋  $\alpha$



6

図8 羽状紋地獸紋鏡群の諸型式

(1. 長沙子彈庫 M41 2. 長沙勞賀 M1 3. 南陽一中 M436 4. 長沙子彈庫民主嶺 M10 5. 長沙柳家大山 M33 6. 長沙子彈庫 M86)

のうちの「×」配置の形式のなかでも、IV・VI・VIII式は周縁端部に平坦面があり、V・VII・IX式は完全にヒ面化しているという特徴がある。

獣紋鏡の場合には鈕座が円形のため、主紋の主軸と同方向であれば「+」配置、主軸と方向がずれていれば「×」配置と判断する。一般的な獣紋鏡は、地紋 $\beta \cdot \gamma$ が採用される一部の鏡に「+」配置が見られるものの、それ以外は「×」配置である。そのうちの〔平坦面有一凸帯〕のI b式は山字紋鏡のIV・VI・VIII式の縁形態から変化が進んだ型式で、〔平坦面無一段〕のII a式はV・VII・IX式の縁形態に近い。跋郢直後に制作された「×」配置の鏡は周縁端部に一定の平坦面を残していたと考えると、I b式・II a式の獣紋鏡はどちらも跋郢からやや時期を置いて、具体的には前250年頃の制作と見積もるのがよいだろう。前3世紀後半とされてきた従来の年代観とも大きな齟齬はない。〔平坦面無一段〕のII b式は、それよりさらに一段階遅れ、前221年の秦による統一前後から前3世紀末までの制作と見ておく。

先に「一般的な」獣紋鏡と述べたのは、本稿で対象とする羽状紋地獣紋鏡群には、獣紋かそうでないかが明らかにされていない主紋がしばしば見られるからである（図8-4・5・6）。それらを「変形獣紋」と仮称し、その特徴を見ると、主紋が4つの場合にはその中心軸に対して地紋が斜めに配され<sup>(2)</sup>（「×」配置）、いずれも地紋単位 $\alpha$ で形態はI b式もしくはII a・II b式である。主紋が5つの場合には地紋方向が定まらないが、〔平坦面有一段〕のI a式が含まれ、早ければ跋郢以前の江陵、遅くとも跋郢直後の長沙で制作されたであろう。I b式およびII a式の「×」配置は跋郢後やや時期を置いて、II b式が秦による統一前後から前3世紀末までの制作と考えれば、山字紋鏡や一般的な獣紋鏡の変遷観とも矛盾しない。これによって、獣紋鏡、変形獣紋鏡ともに従来の羽状地紋鏡群の編年の枠組みに位置づけることが可能となる。

ただし、縁形態が古手のI a式、あるいは地紋が「+」配置であっても、周縁内側の凸帯が縄状になったり、周縁と凸帯の隙間が席紋で埋められたり、地紋単位 $\beta \cdot \gamma$ が採用される場合がある。そのような特徴をもつ鏡の制作時期は下らせて考える必要があり、場合によっては秦～漢初にまで下りうる。その背景については、本稿の主題からはずれぬため、後に補論として述べる。獣紋鏡の性質をつかみきれない所以であるが、ひとまずは縁形態を第一の指標としつつ、地紋や主紋、それに従属するその他の紋様なども加味し、総合的に判断していくしかない。

### 三 図像の解釈

羽状紋地獣紋鏡の変遷観が一応確かめられたところで、主紋の獣紋と、先に「変形獣紋」とした紋様の正体、および鏡背全体で構成される図像の意味について考えていきたい。

#### (1) 獣紋の正体について

多くの研究が獣紋、獣形紋、禽獣紋などと仮称・総称するなか、早くに沈從文は「長尾獣（雉）」と呼び〔沈1957〕、樋口隆康は「鼠か熊かカンガルーに似た長尾の獣・・・周礼の六彝の一つに雉彝というのがある。雉とは、尾ながざるのことであるが、この図文が恐らく雉であろう」と指摘する〔樋口1979〕。

雉とは、『説文解字』に「如母猴。印鼻、長尾」と言い、『爾雅』積獸に「印鼻にして長尾。時

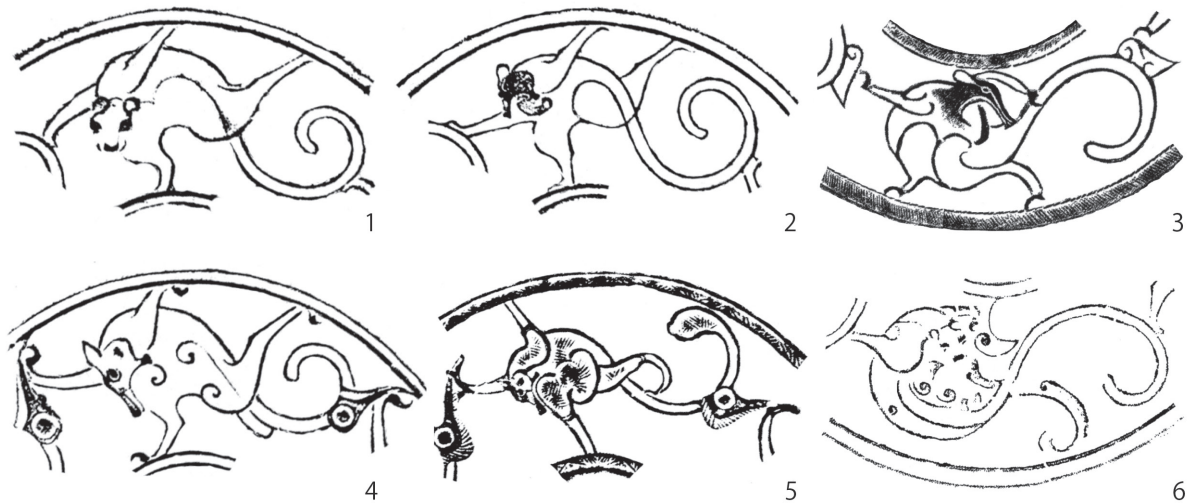


図9 獣紋表現(1. 長沙妹子山 M20 2. 長沙子弹庫 M41 3. 儀徵張集鄉团山 M1 4. 長沙筭笠坡 M744  
5. 長沙砂野 M4 6. 長沙労働広場賀龍体育館 M1)

に善く領に乗る」とあるように、仰向きの鼻、長い尾をもち、よく山嶺に上る猴のような獣である。『山海経』中山経では、鬲山に住む獣のひとつに挙げられている<sup>(3)</sup>。とくに「獣=蝮」説を支持する研究はないが、かといって批判されるでもなく、「蝮」かもしれないが確証がないからとりあえず獣と呼んでおく、というのが戦国鏡について議論する際のスタンスになっていると感じている。

縁形態や地紋の変化に基づけば、I a式やI b式・II a式の獣紋は、4体すべてが正面向き、すべてが上向き、すべてが横向き、正面・横2体ずつなどのヴァリエーションはあるものの、ほとんどが左前脚と左後脚は周縁を、右後脚は鈕座を、右前脚は隣の獣のくるっと巻いた尾をつかむ(図9-1)。左右の前脚・後脚を広げた様は、踏んばっているようにも、身体を大きく見せているようにも受けとれる。横向きの場合には、牙の表現があったり、舌を出していたり、ことさら強調した姿勢に見うけられる(図9-2)。耳は丸かったり三角に尖っていたりするが、II b式の鏡では耳が尖り、お腹を見るように身体を丸めた姿になっているから、丸い耳で身体を広げた獣がより古い表現だろう。

I b式だが周縁内側の凸帯が縄状になり、地紋単位 $\alpha \cdot \beta$ が組み合わさる儀徵出土鏡では、獣は通例と異なり縁側に立ち、後ろを振りかえり、左手は自身の尾をつかむ(図9-3)。地紋単位が $\beta$ の長沙出土の鏡でも、同様に獣は縁側に立ち、後ろを振りかえる。獣の頭部の傍では、鈕座から子葉形が伸びる(図9-6)。別の長沙出土鏡(図9-4)や儀徵出土鏡、長沙出土のII b式(図9-5)では、尾の途中に子葉形がつく。

では、より古い表現と思われる、耳が丸く身体を広げた獣の正体は何か。「蝮」の特徴

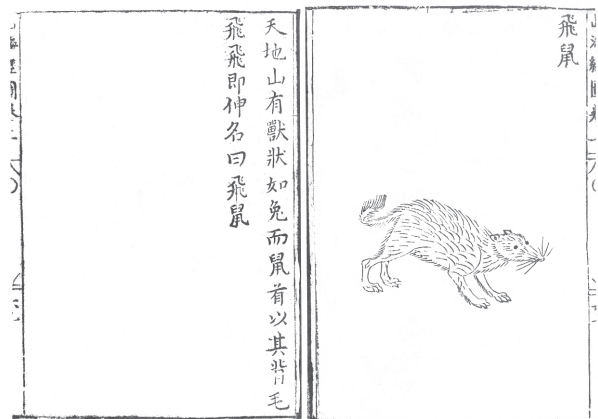


図10 『山海経図』飛鼠

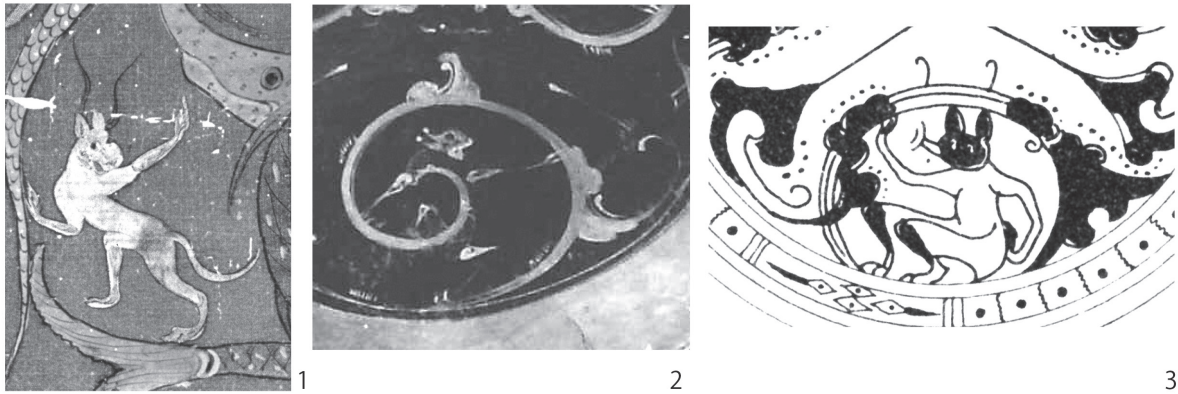


図11 漢代の獣紋表現（1. 長沙馬王堆 M1 帛画 2. 江都王陵 M1 漆盤 3. 邗江楊壽鄉宝墩新莽墓漆盤）

とされる仰向きの鼻というよりは、キツネザルなどの原猿類に見られる突出した吻をもち、尾は長く、身体を大きく広げる獣である。近年、これをムササビとする説が示されている [潘 2019]。ムササビは『山海経』や『爾雅』に飛鼠・飛生・鼯鼠・夷由と記載され (図 10)、漢初には中国で存在が知られていたとわかっており、「飛生」の音が「飛昇」に通じることから、漢代には死後昇仙を象徴する瑞獣として見られた可能性があるという。

たしかに、よく似た獣表現が漢代にも見られる。前漢前期の前 186 年に没した軹侯利蒼の夫人が埋葬された馬王堆 1 号漢墓出土の帛画の下方で魚の尾に乗る獣は (図 11-1)、戦国鏡の獣と同じ姿勢だが、やたら細身である [湖南省博物館ほか 1973]。前漢中期の前 128 年に没した江都王非が墓主とされる江都王陵 1 号墓出土の漆盤では (図 11-2)、背筋から尾のように伸びる雲気が獣の周囲をめぐる [南京博物院ほか 2020]。さらに江蘇邗江出土の前漢河平元 (前 28) 年銘をもつ漆盤では (図 11-3)、尾が短く、代わりに周囲に雲気がめぐっている [揚州博物館ほか 1991]。「飛昇」を連想する滑空姿勢が本来の姿であったが、天にただよう雲気と結びつけられたことで、身体的な特徴のみを変化させていった可能性はある。

結局正体は明らかでないが、尾ながざるにせよムササビにせよ、その特徴的な姿勢は跳躍もしくは滑空などの飛昇表現であろう。その根拠については、いわゆる変形獣紋との関係をふまえ、あらためて述べる。

## (2) 変形獣紋の意味と変遷

変形獣紋について、樋口隆康は「もともと禽形が変化して図案化したもので、短くとび出した方が首、長く湾曲している方が尻尾にあたる」と言う [樋口 1979]。しかし、変形獣紋鏡のうち、[平坦面有一段] の I a 式は、羽状紋地獣紋鏡群のなかで最も早い段階の型式であり、よってその主紋様は、禽獣紋の変形ではあり得ない。その特徴は、中央にハート形の子葉形があり、左上方に伸びる茎のようなものの先端が蕾形になっている (図 12-1)。右上方にも何か構造をもつが、これはよく見ると中央の子葉形から出ているのではなく、周縁から伸びている。

まずは先端の蕾形を戦国時代の他の器物で探すと、漆器などに三鳳紋と呼ばれる紋様があり、江陵馬山 1 号墓出土の奩蓋では [湖北省荊州地区博物館 1985]、細長くあらわされた鳳の尾が蕾形に広がっている (図 12-2)。そのような鳳あるいは龍の体躯が変形され、秦代には雲気紋が成立す

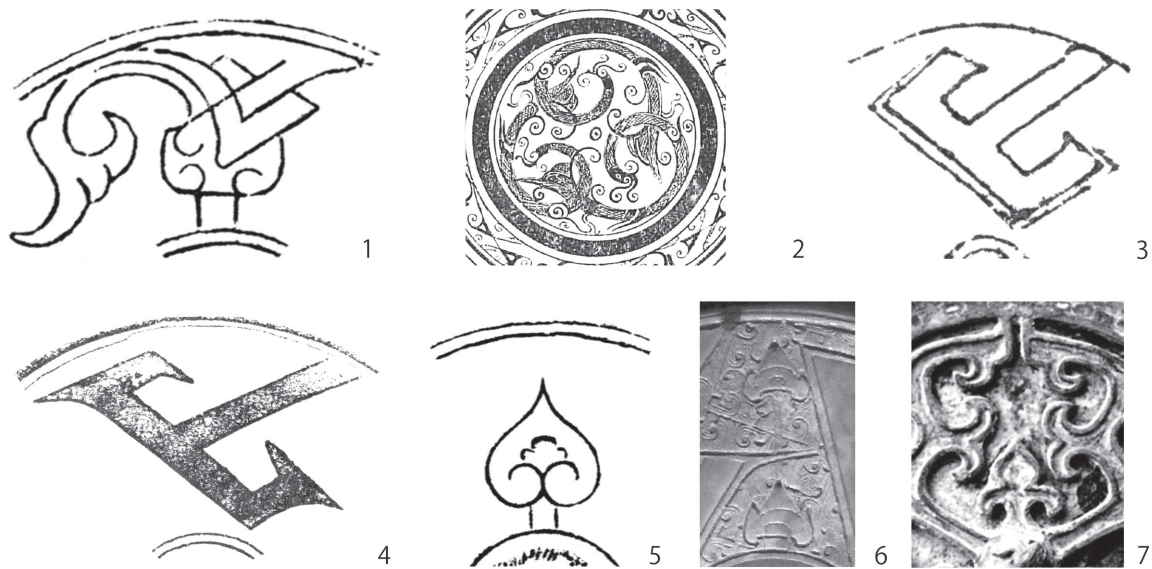


図 12 戦国時代の鈎と天柱の表現

( 1. 長沙子弹庫民主嶺 M10 花蕾紋鏡 2. 馬山 M1 漆奩 3. 古丈白鶴灣 四山字紋鏡 4. 江陵九店 M15 五山字紋鏡  
5. 長沙伍・楊 M22 葉紋鏡 6. 常德德山 M7 五山字紋鏡 7. 洛陽西工区 M7602 透彫二重体鏡 )

ると指摘されており [岡村 1991]、先に紹介した邗江出土の漆盤で獣の周囲をめぐる雲気も先端が蕾形になっている。子葉形から伸びる蕾形も、そのような雲気の表現であろう。

次に、中央の子葉形の右上に周縁から伸びる構造は何か。戦国鏡の紋様で、同じように周縁から伸びる構造といえば、山字紋鏡の「山字紋」がある。山字紋は、天に見立てられた周縁から吊り下がった「鈎」で、漢代の方格規矩四神紋鏡の「L」形に相当し、左旋する天と大地とをつなぐ役割を果たしていると言われる [曾布川 2014]。「既に天の左旋が天文の大原則として強烈に意識されており、天の左旋に合わせて山字文のいずれもが左方に傾いている」と指摘されるように、早い段階の羽状紋 (B2 類) を地紋とする長沙月亮山出土の五山字紋鏡では山字が左方に傾く。ただし、古丈白鶴灣出土鏡などの四山字紋鏡のなかでも早い型式 [湖南省博物館ほか 1986]、あるいは江陵九店 15 号墓から出土した五山字紋鏡では [湖北省文物考古研究所 1995]、円圏鈕座の周りに右に傾く山字紋が配されている (図 12-3・4)。天の「左旋」という意識は疑わしいが、山字紋が旋回する天と大地とをつなぐ役割を果たしていた点に異存はない。

子葉形の右上で周縁から伸びる構造が山字紋と同じ天と大地とをつなぐ構造であるならば、子葉形は草木の形に見立てた天柱の表現である。中央の子葉形だけを見れば、葉紋鏡に見られるハート形やチューリップ形の葉紋とも似ている (図 12-5)。同様の表現は、五山字紋鏡や洛陽出土の透彫二重体鏡 [洛陽市文物工作隊 2004] にも見られ (図 12-6・7)、漢代には蟠螭紋鏡の草葉紋に継承される。つまり、先端に蕾のつく子葉形と周縁から伸びる構造は、大地に立つ天柱と天から吊り下がる鈎の象徴的表現であり、鏡背全体で宇宙をあらわしていると考えられる。羽状紋地葉紋鏡や前漢の草葉紋鏡と共通する思想に基づいてつくられた鏡であることを明確にするために、花蕾紋鏡と呼ぶことにしたい。

問題は、それとは別の、I b 式あるいは II a 式に多く見られる変形獣紋である。便宜上、変形獣紋 A、変形獣紋 B と呼ぶ (図 13-1・2)。変形獣紋 A は、所蔵鏡 12 に紹介したように、本来な

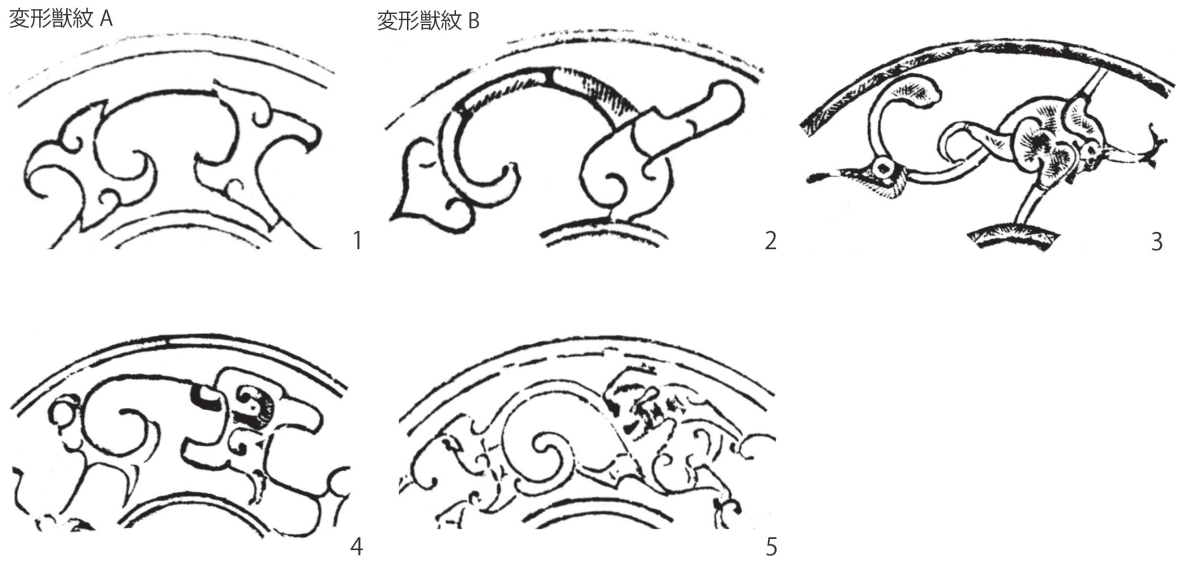


図13 変形獣紋と獣紋 (1. 長沙柳家大山 M33 2. 長沙魏家堆 M1 3. 長沙砂野 M 4を反転  
4. 長沙九尾冲水泥電桿廠 M21 5. 長沙楓樹山 M42)

ら獣が配されるところに幾何学的な紋様を置く。幾何学紋様のなかには羽状紋や円形で飾られ、獣の尾に相当する曲線の先は植物様につくられる。植物様の先端が鳥類の頭にも見えるため、鳥紋鏡と呼ばれることもあるが、この紋様の正体は何か。長沙風樹山出土の鏡に左右の手や脚が縁や鈕座に接していない獣がいる (図13-5)。獣の前方には尾が伸び、その途中には子葉形がつく。その形態が、変形獣紋 A とそっくりである。獣の手足や尾の形状が幾何学紋様に残され、内部の羽状紋などは獣の頭や脚の付け根の省略形であるとわかる (図13-4)。この紋様は、たしかに獣紋の変化形、すなわち変形獣紋と呼んで差し支えない紋様である。

変形獣紋 B は、茎を伸ばして複雑化した葉紋と言われるように [曾布川 2014]、葉紋の一種である花蕾紋と形が似る。子葉形の根元から左上方に茎のようなものが伸び、その先にさらに子葉形 (花蕾紋では蕾形) がつく点、中央の子葉形の右上方にも構造が見られる点である。しかし、右上方の構造が縁に接していない点や、中央の子葉形の根元に見られる気の渦巻く方向など、異なる点もある。花蕾紋鏡では、右上方の構造は天と大地とをつなぐ役割を持っていたから、変形獣紋 B の右上方の構造も同じ役割を持つならば、円形の天に見立てられた縁に接していないことは重大な欠陥である。

根元の気の渦巻く方向に注目するならば、花蕾紋よりも獣紋の方がむしろ似ている。長沙砂野出土鏡に見られる獣を反転すると (図13-3)、変形獣紋 B の根元の雲気の渦巻く方向と獣の身体各部、尾の途中に子葉形がつく点などが一致する。この鏡では子葉の形が異なるものの、儀徴出土鏡のように近い形も見られる。変形獣紋 B の左に伸びる茎のようなものを獣の尾の名残、右上方の構造を腕と頭の変化形と見ると、紋様全体の丸みとあいまって、よく似た印象をもつ。獣紋の類例が少なく、確証は持てないが、こちらの紋様も変形獣紋とみなしておきたい。

ただし、変形獣紋 B の成立にあたっては、花蕾紋鏡の影響もあったと想定している。花蕾紋から変形獣紋 B への直接的な影響というよりは、花蕾紋鏡を含む葉紋鏡と獣紋鏡との関係が重要である。すでに指摘したように、獣紋の変遷過程において、鈕座や獣の尾などに子葉形をつくもの



が現れる。その子葉形は、葉紋鏡に見られるチューリップ形やハート形の子葉の変形であり、江蘇邗江出土の漆盤で獣の周囲にめぐる雲気に通ずる表現であろう。先に述べたように、子葉形を天柱の表現と捉えると、同じ属性をもつ獣も、龍や鳳凰のように天に昇ることが可能と考えられた獣と見るべきである。ゆえに、尾ながざるにしてもムササビにしても、飛昇する姿に表現されることが重要である。花蕾紋鏡を含む葉紋鏡と獣紋鏡は、どちらも当時の天地の関係、つまりは宇宙観をあらわす鏡であり、この共通性の上では、変形獣紋 B が獣紋の変化形か花蕾紋の一派かを議論することに大きな意味はない。

なお、チューリップ形やハート形の葉紋鏡（石谷 2013 の D 群、石谷 2021 の C 類 -3）と獣紋鏡群とは、ヒ面化した周縁（端部平坦面がほぼないか全くない）、円圈鈕座、地紋単位  $\beta$  など共通する特徴が見られる。なかでも、地紋単位  $\beta$  の共有は、両鏡群の制作に用いられた印型の同一性、つまりは同一の工房で生産された鏡群である可能性を示す。漢墓を除けば出土地が長沙かその周辺に偏る点も考慮し、両鏡群は前 3 世紀後半に長沙付近で営まれた工房でつくられた近縁の鏡であったと見る。

#### 四 鏡から探る漢初の長沙

花蕾紋鏡の制作が前 278 年の跋郢以前の江陵で始まり、獣紋鏡・変形獣紋鏡の I b 式および II a 式が跋郢後の長沙で、獣紋鏡・変形獣紋鏡・花蕾紋鏡の II b 式が前 3 世紀後半の長沙で制作されたとすると、羽状紋地獣紋鏡群の変遷は、戦国末から秦代、そして漢代初頭の長沙周辺の動向を探るうえでおいに重要である。同時期の他鏡群や他器物との関係から、前 3 世紀後半の長沙とその周辺の動態を探り、まとめとしたい。

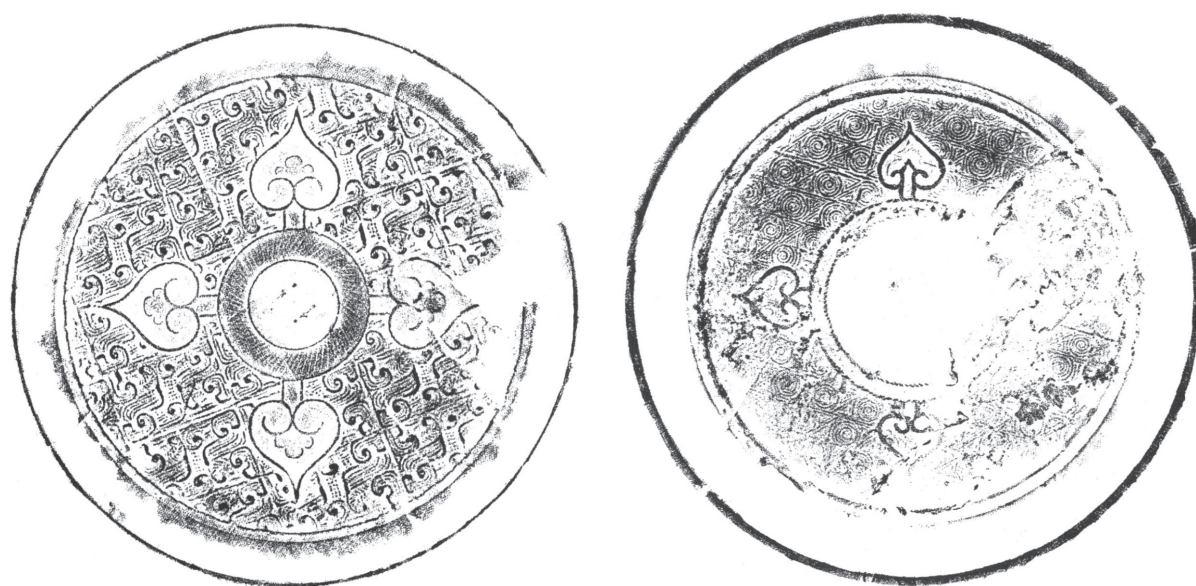


図 14 羽状紋地葉紋鏡と雷紋地葉紋鏡（1. 龍山里耶 M293 2. 龍山里耶 330 号 S = 2/3）

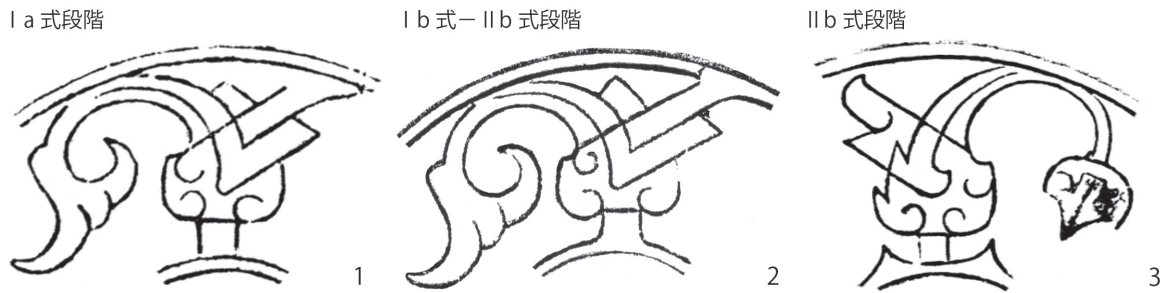


図15 花蕾紋表現(1. 長沙子彈庫民主嶺 M10 2. 長沙勝利路 M10 3. 長沙大冬瓜山 M5)

### (1) 獸紋鏡と雷地紋鏡・蟠螭紋鏡

前3世紀中頃に獸紋鏡・変形獸紋鏡のI b 式・II a 式が長沙周辺でつくられた頃、同じく長沙周辺で制作されたと考えられる鏡に、羽状紋地葉紋鏡と雷地紋鏡とがある。

葉紋鏡のうち、チューリップ形やハート形の葉紋を主紋とするものは、地紋を施すための印型(地紋単位 $\beta$ )が新たに用意されたことから、もとは江陵、そして跋郢後の長沙で鏡をつくった工房・工人が遷都にあわせて寿春に移動した前241年以降に、鏡工人の生き残り、あるいは子孫一族が長沙で再生産した鏡であると考えている[石谷2021]。

また雷地紋鏡は、細地紋に系譜の連なる雷紋を地紋とする鏡群で、地紋のない連弧紋鏡や圈帯紋鏡などの秦鏡にゆかりのある鏡が生み出されて以降に成立したと考えられるが、七面化した周縁、円圈鈕座、主紋に葉紋が採用されるなど、葉紋鏡の影響も見られる[石谷2018]。とくに葉紋表現の共通性から(図14)、葉紋鏡の生産が長沙で開始されて以降に雷地紋鏡もつくられ始めたを見ると、その制作年代は前241年以降に絞られる。

地紋単位 $\beta$ をもつ獸紋鏡は、長沙で再生産された葉紋鏡と同様に前241年以降に下るため、雷地紋鏡とも制作時期が重なることになる。第2節で前3世紀後半に位置づけたII b 式も、端部に平坦面のない周縁形態の共通性から、制作年代はやはり前241年以降に絞られよう。II b 式は獸紋鏡だけでなく花蕾紋鏡にも見られ、I a 式の花蕾紋鏡とは異なる主紋表現が行われている(図15)。このような花蕾紋鏡の再生産とあわせて、獸紋鏡の子葉付加、変形獸紋A・Bに見られる獸紋の葉紋化が起こるあたり、この時期の長沙では葉紋鏡の時代を迎えていたと言えよう。

そうした時代のなかで、やはり長沙周辺で蟠螭紋鏡が創出される。初現期の蟠螭紋鏡は、細地紋鏡の一部の型式を変化させた鏡で、明らかに長沙周辺に出土地が偏ることから、長沙一帯が秦の領域化に組み込まれてから生産が始まったと考えられる[石谷2018]。その具体的な年代は明らかでないが、前3世紀半ばから楚滅亡の前222年の間に納まる。この時期の蟠螭紋鏡に見られる主紋は細地紋鏡に由来する龍や鳳凰であるが、その間には雷地紋鏡に見られるものとよく似た葉紋が立つ(図16-1・2)。直接的には雷地紋鏡の影響であろうが、その系譜は長沙の葉紋鏡にたどられる。楚鏡か秦鏡かの違いはあれど、長沙の葉紋鏡群としての共通性を一貫して保持している。

羽状紋地葉紋鏡・花蕾紋鏡・獸紋鏡・変形獸紋鏡、雷紋地葉紋鏡、細紋地蟠螭紋鏡、そして雷紋地蟠螭紋鏡へとつづく一連の葉紋鏡群は、いずれも天柱や天から吊り下がる鈎、天に昇った獸や龍を表現した鏡であり、戦国楚から秦への宇宙観の継承を映し出している(図17)。前漢鏡に系譜の連なる宇宙観は、戦国後期の長沙周辺で生まれ、形式化を遂げて、秦漢時代へと受け継がれたのである。なぜ長沙を舞台としたのか。その理由は、歴史的背景から考察する必要があるだろう。



図 16 雷紋地葉紋鏡と細紋地蟠螭紋鏡（1. 長沙月亮山 M18 2. 長沙裕湘紗廠 M12）

## （2）馬王堆漢墓・虎溪山漢墓と漢初の長沙

漢初の長沙周辺の動向を考えるうえで欠かせない遺跡は、やはり馬王堆漢墓である。長沙市の東郊に位置し、五代楚王馬殷とその家族墓地と伝えられたことから「馬王堆」と呼ばれた土冢は、発掘された玉印や封泥・漆器の記載などから前漢前期の前 186 年に没した軫侯利蒼（2 号墓）、<sup>(5)</sup>出土した木牘から文帝十二（前 168）年に没したことが明らかな利蒼の息子（3 号墓）、そしてその少し後に没した軫侯利蒼の夫人（1 号墓）の墓であると明らかになった [湖南省博物館ほか 1973]。馬王堆の各墓はいずれも斜坡墓道を伴う台階式の竪穴墓で、墓室には葬具として椁棺を構築する。椁棺は木炭と白膏泥で固められていた。1 号墓の出土品には、先に紹介した獣紋表現の見られる帛画のほか、北辺箱内に漆奩に納められた蟠螭紋鏡があり（地紋は浅く識別不可）、棺にも獣や龍の表現が用いられている。また 3 号墓でも、やはり北辺箱の漆奩内に細紋地蟠螭紋鏡（図 18-1）が納められていた [湖南省博物館ほか 2004]。

また、沅水中流の沅陵鎮西にある虎溪山漢墓は、玉印に「呉陽」の名が刻まれており、頃侯呉陽の墓と知られる。呉陽は前 162 年に没しており、<sup>(6)</sup>埋葬年代は馬王堆 3 号墓や 1 号墓と近い。馬王堆各墓と同じく台階式の竪穴墓で、墓室内の椁棺はやはり木炭と白膏泥で固められていたが、斜坡墓道が墓室底面から伸びる点に違いを認める。細紋地蟠螭紋鏡（図 18-2）が出土しているほか、漆盤（MIN：64）には雲気をつかみ天に遊ぶ獣の彩画が施されている [湖南省文物考古研究所 2020]。

『史記』秦楚之際月表によると、秦末に陳渉が挙兵し、項梁・項羽が立ったことで知られる楚地域は、秦滅亡の前 206 年に西楚（項羽の領地）・衡山・臨江・九江の四つに分けられる。このうち衡山には、秦の時に番陽令の任にあり、長江・鄱陽湖一帯の民心を得て「番君」と号した呉芮が封ぜられ、<sup>(7)</sup>臨江にはもと楚の柱国であった共敖が封ぜられ、江陵を都とした。<sup>(8)</sup>劉邦が項羽を破った前 202 年には、臨江が漢の南郡と長沙国とに分けられ、衡山王呉芮が長沙王に徙され、臨湘を都とした。<sup>(9)</sup>つまり長沙国は、おそらくは旧戦国楚地域の出身であり、項羽に衡山王に封じられた

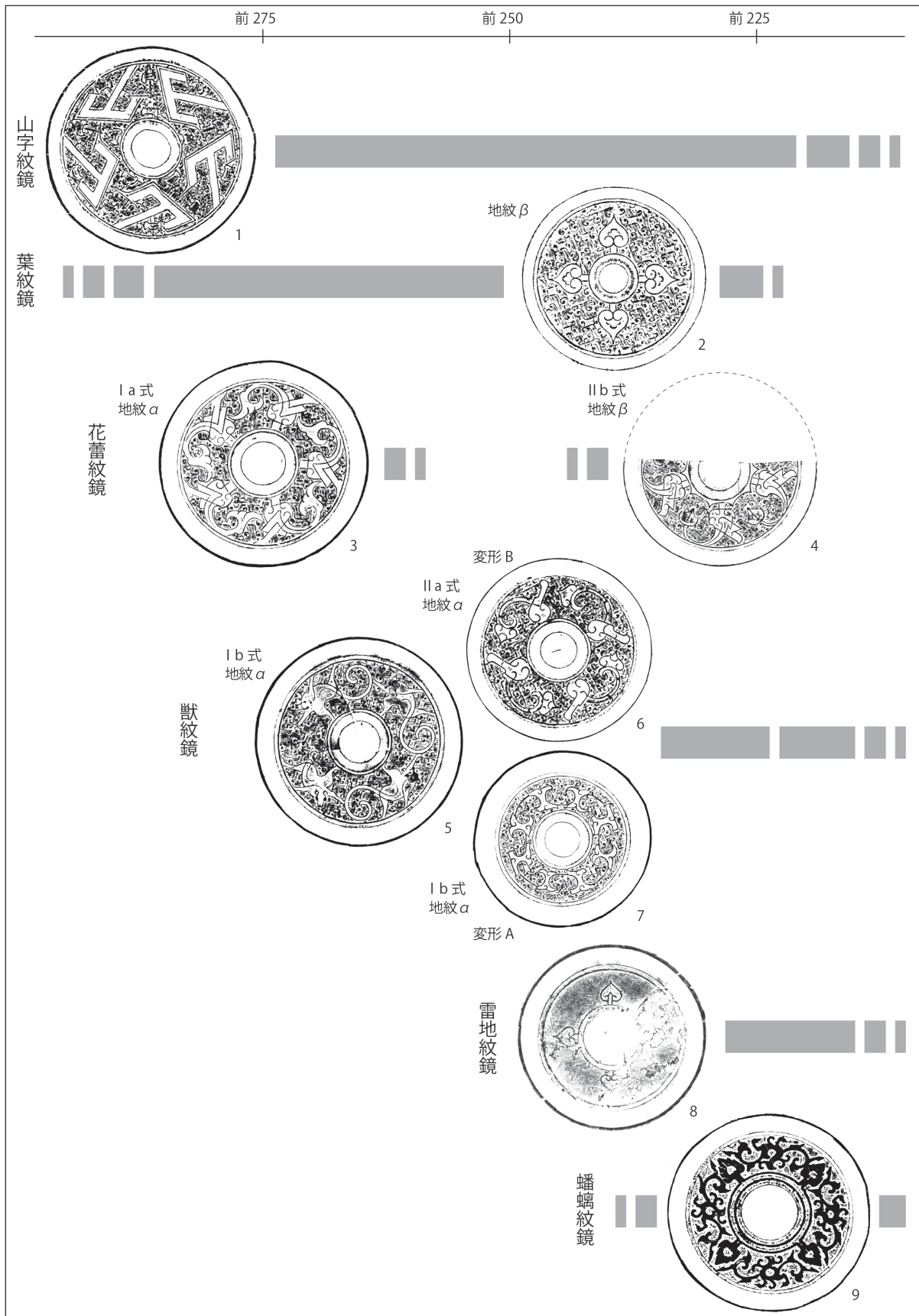


図 17 前 3 世紀の鏡の変遷 ( 1. 常德德山 M7 2. 長沙伍・楊 M22 3. 長沙子彈庫民主嶺 M10 4. 長沙大冬瓜山 M5  
 5. 長沙子彈庫 M41 6. 長沙魏家堆 M1 7. 長沙柳家大山 M33 8. 龍山県里耶 M330 9. 長沙裕湘紗廠 M12 縮尺不同 )



図18 長沙周辺漢墓出土の細紋地蟠螭紋鏡（1.長沙馬王堆 M3 2.沅陵虎溪山 M1）

呉芮が、漢初にも再び諸侯王として封建されたことから始まる。高祖末年には異姓諸侯王が次々と排除されるが、呉氏長沙王は前157年まで受け継がれた。

馬王堆2号墓の主である利蒼は、前193年に軫侯となるまでは長沙国の丞相を務めていた<sup>(10)</sup>。同墓からは「長沙丞相」の銅印も出土している。軫侯一族の墓が軫ではなく長沙につくられた理由ははっきりしないが、長沙にゆかりのある人物が埋葬された長沙漢墓と言える。斜坡墓道つきの台階式竪穴墓に椁棺を築く構造や、椁棺を包む木炭と白膏泥、2号墓・3号墓に見られる鏡を漆奩に納めた副葬などは、いずれも戦国楚以来の長沙の風習である〔樋口1975〕。

虎溪山漢墓の主である頃侯呉陽は、長沙王を父とする<sup>(11)</sup>。墓の構造は、基本的には楚の風習を踏襲するが、斜坡墓道の設け方に漢代の新式の要素を認める。鏡を玉印や玉璧とともに棺内に納めるのも、被葬者の身に所持品を納める中原の風の影響であろう。

戦国時代の楚で生まれた文化は、秦による支配を受け、前漢の諸侯国となってからも、依然として受け継がれていた。羽状地紋鏡群と細地紋鏡群の融合によって蟠螭紋鏡が生まれたように、秦・漢初の長沙において楚文化と中原文化とが結びつくなかで、「秦漢様式」〔岡村1991〕とも定義される文化が形成されていったと考えられる。馬王堆漢墓・虎溪山漢墓はそのひとつの結節点であり、器物に込められた思想とともに漢文化の基盤となった。それは、秦から漢初にかけて長沙周辺を地盤とした呉氏とその周囲の人々の隆盛を背景とするものであったと推察する。

## おわりに

以上、羽状紋地獣紋鏡を型式学観点、図像学的観点から分析し、戦国鏡のなかでの位置づけと歴史的背景について考察してきた。鏡群の性質を見極めるために、発掘資料を中心とした議論を進めてきたが、本稿の第一の目的は所蔵鏡の再評価を行うことである。そこで、ここまでの議論

を踏まえたうえで、改めて所蔵鏡の年代その他の特徴についてまとめ、おわりとしたい。

○鏡9 縁形態は[平坦面有一凸帯]、縁厚0.7cmのI b式。地紋 $\alpha$ 。類例に益陽黄泥湖 M586鏡(I b式・地紋 $\alpha$ )があり、戦国後期、具体的には前3世紀中頃に位置づけられるが、鏡径が大きく、周縁端部の平坦面はかろうじて残る程度で、鈕も大ぶりの点が気になる。獣の尾は左後脚の前を通るのが通例であるが、本鏡では脚が尾を跨いでおり、このような表現は今のところ発掘資料には認められない。年代をいくらか下げる必要があるだろう。

○鏡10 縁形態は[平坦面有一段]、縁厚0.5cmのI a式。地紋 $\beta$ 。I a式の地紋 $\beta$ は、今のところ発掘資料中には認められない。主紋の類例はないが、長沙勞賀 M1鏡(I b式・地紋 $\beta$ )に雰囲気は近い。方向性は異なるものの、どちらも葉紋化した表現であり、制作時期も近いと見る。型的には古手だが、制作年代は寿春遷都の前241年以降に下ると判断する。

○鏡11 縁形態は[平坦面有一凸帯]、縁厚0.7cmのI b式。地紋 $\alpha$ 。鈕座外側の八角形凸帯のうち四方につく葉紋は、葉紋鏡や雷地紋鏡にも見られる形で、そこから伸びる植物形は長沙風樹山 M42鏡の獣の尾に見られる形である。この植物形はおそらく本来は獣の尾につく葉紋で、鈕座から出る葉紋と合体してこのような形になったと思われる。類例としては長沙月亮山 M55鏡(II a式・地紋 $\alpha$ )を挙げられるが、そちらでは鈕座の周りに光芒か雲気をあらわす形がめぐる。月亮山 M55鏡は前3世紀中頃に位置づけられるが、本鏡は葉紋と植物形からなる天柱が形式化した表現となっており、いくらか年代を下げる必要があるだろう。

○鏡12 縁形態は[平坦面有一凸帯]、縁厚0.6cmのI b式。地紋 $\alpha$ 。変形獣紋の類例には長沙九尾冲水泥電桿廠 M21鏡(II a式・不明)があるが、本鏡ではいっそう形式化が進み、獣の名残すら失われている。型的には前3世紀半ば以降の鏡だが、本鏡に関しては後世の偽作とする判断に変わりはない。

○鏡13・1005 両鏡ともに縁形態は[平坦面無一段]、縁厚0.4cmのII a式。地紋 $\alpha$ 。長沙魏家堆 M1鏡をはじめ、変形獣紋Bを主紋とする鏡のすべてがいわゆる同型鏡である。原型どうしの境界、主紋配置まですべての特徴が共通する点、所蔵1005鏡のような鑄型由来の傷も認められる点、所蔵2面の鏡径14.0cmが今のところ最大で、最小の鏡径13.5cmと0.5cmも差がある点を考慮し、同一範の使用や製品の踏み返しによる鑄型起こしをくり返して量産された鏡群と考える。鏡群の制作開始年代の上限は前3世紀中頃だが、江陵鳳凰山8号墓のような前漢墓からの出土例も認められるため、戦国末年あるいは漢初まで生産が続いた可能性がある。

○鏡14 縁形態は[平坦面無一凸帯]のII b式。縁厚は0.3cmとやや薄い。地紋 $\gamma$ 。主紋の花蕾紋は長沙勝利路 M10鏡(I b式・地紋 $\alpha$ )に近い表現だが、子葉の左上方に伸びる茎が一筋で、周縁から離れる点に特異性を認める。地紋 $\gamma$ は、今のところ本鏡の他に南陽一中436号漢墓出土鏡を認めるのみである。戦国鏡には見ない地紋であり、秦による統一前後から漢初の間新たに印型が用意されたと考える。

## 補論—南陽出土の羽状紋地獣紋鏡

河南省南部の南陽では、一中 436 号墓から獣紋鏡、一中 168 号墓から変形獣紋 (A) 鏡が出土している。前者は I a 式・地紋  $\gamma$ 、後者は周縁端部に平坦面が無く、内側には段も凸帯もない。前者の地紋  $\gamma$  もさることながら、後者にはそもそも地紋が施されず、特異である。所蔵鏡 14 も含め、これら 3 面が長沙周辺でつくられたとは考え難い。

かつては楚の領地であった南陽 (宛) は、秦・昭襄王十五 (前 292) 年に白起に攻め落とされ、秦の支配下に置かれる<sup>(12)</sup>。長江流域と黄河流域の中間地点であり、交通路として、軍事拠点としての要地であった南陽では、農業・商業が発達し、高い生産基盤が整っていた。もともと魏や韓でつくられた細地紋鏡は、秦による中原地域への侵攻が進むと、被支配地の工人が徙されたことで、南陽で生産されるようになったと推測している [石谷 2018]。鑄鉄で富を成したことで知られる孔氏も、その先祖は梁の人で、秦が魏を伐ったときに南陽 (宛) に徙された<sup>(13)</sup>という。南陽の楚墓からは山字紋鏡も多く出土しており、楚領であった頃から羽状地紋鏡群が流通していたと考えられる。秦の領域に編入されてからも、細地紋鏡だけでなく、旧楚領への流通を目的とした花蕾紋鏡や獣紋鏡の生産も行われた可能性は十分に考えられる。その生産体制のなかには、跋郢後に江陵や長沙から徙された楚の工人も含まれていたかもしれない。

雷地紋鏡や蟠螭紋鏡はそのような工人の移動を背景とする中原文化と楚文化との融合から生まれたのであり、前 3 世紀後半には長沙だけでなく南陽でも羽状紋地獣紋鏡が生産された可能性を視野に入れておかなければならない。

## 注

- (1) 石谷 2021 では前者を C 類 -1、後者を C 類 -3 とした。
- (2) 「変形獣紋」を主紋とする鏡では、主紋の中心軸ではなく鈕と地紋の方向が合う。主紋の中心軸の捉え方が獣紋と「変形獣紋」とで異なった可能性もあり、後述する主紋の意味の違いや移り変わりを反映しているかもしれない。
- (3) 『山海経』中山経に「兩山、其陽多金、其陰多白珉。蒲鶒之水出焉、而東流注于江、其中多白玉。其獸多犀象熊羆、多玃雌」とある。
- (4) 『山海経』北山経に「又東北二百里、曰天池之山。其上無草木、多文石。有獸焉、其状如兔而鼠首、以其背飛、其名曰飛鼠」とあり、『爾雅』積鳥に「鼯鼠、夷由」と見られる。
- (5) 『史記』惠景間侯者年表・軹に「(孝景) 二 (前 193) 年四月庚子、侯利蒼元年」「(高后) 三 (前 185) 年、侯豨元年」、『漢書』高惠高后文功臣年表・軹侯黎朱蒼に「(孝惠) 二年四月庚子封、八年薨」とある。
- (6) 『史記』惠景間侯者年表・沅陵に「(高后) 元 (前 187) 年十一月壬申、頃侯吳陽元年」「(孝文) 後二 (前 162) 年、頃侯福元年」とあり、『漢書』高惠高后文功臣年表・沅陵頃侯吳陽に「(高后元年) 七月丙申封、二十五年薨」とある。
- (7) 『漢書』吳芮伝に「秦時番陽令也。甚得江湖間民心、号曰番君」とある。
- (8) 義帝元 (前 206) 年「分爲衡山。王吳芮始、故番君。都郢」「分爲臨江。王共敖始、故楚柱国。都江陵」とある。
- (9) 四 (前 202) 年 (衡山)「徙王長沙」(臨江)「属漢、爲南郡」、(長沙)「分臨江爲長沙国。衡山王吳芮爲長沙王」とある。

- (10) 『史記』惠景間侯者年表・軼に「長沙相、侯、七百戸」とある。
- (11) 『漢書』高惠高后文功臣年表・沅陵頃侯吳陽に「以父長沙王功侯」とあり、『史記』秦楚之際月表に「(高祖五：前 202 年六月) 薨、諡文王。長沙成王臣始、芮子」、漢興以來諸侯王年表に「(高祖六：前 201 年) 成王臣元年」「(孝惠二：前 193 年) 哀王回元年」とあるから、吳陽はおそらく第二代成王臣の子であろう。
- (12) 『史記』秦本紀に「(昭襄王) 十五年、大良造白起攻魏、取垣、復予之。攻楚、取宛」とある。
- (13) 『史記』貨殖列伝に「宛孔氏之先、梁人也。用鉄冶為業。秦伐魏、遷孔氏南陽」とある。

## 参考文献

- 石谷 慎 2013 「同型鏡・同印鏡論の提言—戦国鏡の制作と流通—」『中国考古学』第 13 号、pp.75-100
- 石谷 慎 2018 「鏡と貨幣からみた秦漢帝国成立期の文化動態」『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第 17 号、pp.78-151
- 石谷 慎 2021 「羽状地紋鏡群の生産・流通と楚の東漸」『春秋戦国時代の青銅器生産』(京都大学文学研究科博士学位論文)、pp.189-226
- 岡村秀典 1991 「戦国から秦漢への文様の展開」『泉屋博古館紀要』第 7 巻、pp.48-69
- 川見典久 2016 「〔修理報告〕中国古代青銅鏡」『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第 15 号、pp.193-204
- 儀徴博物館 2012 『儀徴館蔵銅鏡』鳳凰出版伝媒集団江蘇美術出版社
- 湖南省常德市文物局・常德博物館・鼎城区文物管理处・桃源県文物管理所・漢寿県文物管理所 2010 『沅水下游楚墓』(上中下)、文物出版社
- 湖南省博物館 1959 「長沙楚墓」『考古学報』1959 年第 1 期、pp.41-60
- 湖南省博物館 1960 『湖南出土銅鏡図録』文物出版社
- 湖南省博物館・湘西土家族苗族自治州文物工作隊 1986 「古丈白鶴灣楚墓」『考古学報』1986 年第 3 期、pp.339-359
- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所 2004 『長沙馬王堆二、三號漢墓』文物出版社
- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 2000 『長沙楚墓』(上下)、文物出版社
- 湖南省博物館・中国科学院考古研究所 1973 『長沙馬王堆一號漢墓』(上下)、文物出版社
- 湖南省文物管理委員会 1957 「湖南長沙紙園冲工地古墓清理簡報」『考古通訊』1957 年第 5 期、pp.40-48
- 湖南省文物考古研究所 2007 『里耶発掘報告』岳麓書社
- 湖南省文物考古研究所 2017 『益陽黄泥湖楚墓』(上中下)、文物出版社
- 湖南省文物考古研究所 2020 『沅陵虎溪山一号漢墓』(上下)、文物出版社
- 湖北省荊州地区博物館 1985 『江陵馬山一号楚墓』文物出版社
- 湖北省文物考古研究所 1995 『江陵九店東周墓』科学出版社
- 蔣 宏傑 2010 『南陽出土銅鏡』文物出版社
- 常德博物館 2010 『常德出土銅鏡』岳麓書社
- 曾布川寛 2014 「漢鏡と戦国鏡の宇宙表現の図像とその系譜」『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』第 13 号、pp.1-42
- 長江流域第二期文物考古工作人員訓練班 1974 「湖北江陵鳳凰山西漢墓発掘簡報」『文物』1974 年第 6 期、pp.41-61
- 長沙市博物館 2010 『楚風漢韻—長沙市博物館蔵鏡』文物出版社
- 沈 従文 1957 「古代鏡子的藝術特徴」『文物参考資料』1957 年第 8 期、pp.24-27
- 南京博物院・儀徴博物館籌備弁公室 1992 「儀徴張集団山西漢墓」『考古学報』1992 年第 4 期、pp.477-509
- 南京博物院・盱眙県文化広電和旅游局 2020 『大雲山—西漢江都王陵 1 号墓発掘報告』文物出版社



- 南陽市文物考古研究所 2012 『南陽一中戦国秦漢墓』 文物出版社
- 林巳奈夫 1978 「殷西周間の青銅容器の編年」 『東方学報』 第 50 冊、pp.1-55
- 潘 攀 2019 『漢代神獸図像研究』 文物出版社
- 樋口隆康 1975 「馬王堆の漢墓」 『古代中国を発掘する』 新潮選書、pp.27-163
- 樋口隆康 1979 『古鏡』 新潮社
- 廣川 守 2005 「戦国時代羽状獸紋地鏡群の規格と文様構造—四山字文鏡を中心に—」 『泉屋博古館紀要』 第 21 卷、pp.37-57
- 宮本一夫 1990 「戦国鏡の編年」 (上下) 『古代文化』 42 卷 4・6 号、pp.20-27、13-27
- 揚州博物館・邗江県図書館 1991 「江蘇邗江県楊寿郷宝女墩新莽墓」 『文物』 1991 年第 10 期、pp.39-61
- 洛陽市文物工作隊 2004 「洛陽西工区 M7602 的清理」 『文物』 2004 年第 7 期、pp.12-16
- 李 正光 1957 「略談長沙出土の戦国時代銅鏡」 『考古通訊』 1957 年第 1 期、pp.96-106
- Karlgren.Bernhard 1941 Huai and Han, *Bulletin of The Museum of Far Eastern Antiquities*, no.13, pp.1-125

## 図版出典

- 図 1～5 筆者撮影・作図
- 図 6 筆者作成
- 図 7 (α) 黒川鏡 9 (β) 黒川鏡 10 (γ) 南陽一中 M436 鏡 (蔣 2010) より合成復元
- 図 8 1・4・5. 湖南省博物館ほか 2000 2. 筆者撮影 (長沙市博物館) 3. 蔣 2010 6. 筆者撮影 (湖南省博物館)
- 図 9 1・2・4・5. 湖南省博物館ほか 2000 3. 儀徵博物館 2012 6. 長沙市博物館 2010 より作成
- 図 10 『中国古代版画叢刊二編 第一輯 山海経図』 上海古籍出版社、1994 年
- 図 11 1. 湖南省博物館ほか 1973 2. 南京博物院ほか 2020 3. 揚州博物館ほか 1991
- 図 12 1・5. 湖南省博物館ほか 2000 2. 湖北省荊州地区博物館 1985 3. 湖南省博物館ほか 1986 4. 湖北省文物考古研究所 1995 6. 筆者撮影 (湖南省博物館) 7. 洛陽市文物工作隊 2004 より作成
- 図 13 湖南省博物館ほか 2000 より作成
- 図 14 湖南省文物考古研究所 2007
- 図 15 湖南省博物館ほか 2000 より作成
- 図 16 筆者撮影 (湖南省博物館)
- 図 17 1. 湖南省常德市文物局ほか 2010 2～7・9. 湖南省博物館ほか 2000 8. 湖南省文物考古研究所 2007 より作成
- 図 18 1. 筆者撮影 (湖南省博物館) 2. 湖南省文物考古研究所 2020